

特集

問

い直そう、保育の中のアたりまえのこと

カリキュラムはだれが作る？



インタビュー

とだ まさみ  
戸田雅美氏

東京家政大学教授。専門は保育・幼児教育学。幼稚園、保育園の園内研修に参加のほか、事例を基にした研究にもかかわる。主な著書：『保育者論』（共編著、相川書房）、『保育をデザインする』（フレーベル館）など。

「カリキュラム」って教育（保育）課程のことよね……でも課程って何だっけ、という感じ、ありませんか。

小学校以上だと、教科ごとに学習すべき単元やねらい、学ぶ順番もだいたい決まっています。なので、子どもが何をどの程度習得したかという評価も目に見える形で出しやすい。それに比べて、日本の幼児教育は、小学校の学習の基礎としての心情や意欲、態度をはぐくむ時期とされていますから、目に見えない学びをカリキュラムという筋道に組み立てていくこととなります。実際のところ、保育者は保育計画を立てたり保育記録を書いたりという作業を通して、カリキュラムを見直し修正していると言えるでしょう。その日常的な保育者の作業の緻密さと、落とし穴について、戸田先生は実にわかりやすく語ってくださいました。

聞き手 浜口順子（本誌編集委員）

## 保育をデザインする保育者のすべ

浜口 戸田先生の『保育をデザインする』（フレーベル館 二〇〇四年）というご著書で、保育計画やカリキュラムについて、デザインという言葉を使って考えていらつしやるのが親しみやすい感じがします。

戸田 多分、デザインという言葉自体は私の完全なオリジナルではないと思います。でも、実践を見ていると、計画は立てているんだけど子どもによって全く変わっていくことも多いし、でも変わって見えるけれどもそれは大きな意味では計画にのっとっているみたいなの、そういうところが面白いなと思いつながらデザインという言葉を使わせてもらったんですね。

浜口 デザインでいうと、保育はレディーメイドではなく、オーダーメイドだと……。

戸田 ピンクの服を着たい人もいれば、緑を着たい人もいる。ふわふわつとしたものがいい人もいれば、ちよつと、もこもこがいいという人も。そういうそ

の人の「こうしたいな」という思いがあるけれども、そこにプロの人が入ることによって、その人がこれがいんじゃないかと思つていたよりも着てみたらもつとこつちのほうが良かったとか。自分ではこれを求めていたわけじゃないんだけど、でもまんざら外れてもいなくて、やつぱりプロが入ってくれてよかつたみたいなの、ありますよね。そういうのが多分、保育者がやっている計画なのかなって思っています。

おままごとをいつもやっている子が、ある時、お姫様になりたくなくてティアラを作ろうとしたら、そこでお帰りになり、終わってしまった。保育者はそこで、多分ティアラっていうものをきつかけにしたら、ほかの子たちもその子の面白さに気付けるチャンスかな、と思う。でもそれは絶対そうしなさいっていうわけじゃない。「環境」というのはすてきなもので、別に指示をするわけではありません。「お城ごっこ」の続きをしましょうか」と直接的に誘うのではありません。でも、保育者は、次の日のために、

ほかの子も作れる分のティアラの材料を用意したりします。それも、今まで出したことのないようなすてきな素材も交せて出しておく。翌日、保育者はさりげなく、「見てー！ 銀色紙見つけたの。こんなのお姫様にどうかしら？」とその子に言うかもしれないかもしれません。その子は多分、より一層お姫様になりたくなるだろう……そういうことを狙いながら環境をデザインする。でも、そのデザインの裏には、その子たちのその後の育ちや見通しもありますし、子どもたちの思いが膨らんで遊びが楽しくなってほしいという願いが先生にある。だから「デザイン」と言いたくなくなってしまったのです。計画というと、何のために何の材料を出すのか、ということが大きくなる。だから、子どもがそれに目もくれないと、計画が違うことになる。「こういうつもりで出したんですけど、今日は外れちゃって」みたいなことになる。いやいや外れちゃいないでしょ、と私は思う。保育者って、子どもが自分から自分の殻を破っていくような動きが出てくるように、保育室や園庭にさりげなく物を

用意していく。こういうことをすごくよく考えてやっている。自分自身がする直接的な援助もとてもよくデザインしている。すごい仕事だなんて思います。その点を保育者自身にもっと気付いてほしいし、気付くことで、自信も持ってもらいたかったんです。

## 記録の書き方から保育を振り返る

浜口 デザイン画を描く時って、輪郭をスーッと一筆書きしないで、シユツシユツと、こうかな？ こうかな？ みたいな感じで描くような気がします。試行錯誤しつつ決めていくような……。

戸田 例えば、着る人のことをよく知っている人が服をデザインする時に、一枚だけ描くわけじゃない。たいてい何枚か描いてみますよね。それで実際にその人の雰囲気を見た時に、全然違うっていうこともある。デザイン画で見ると八頭身できれいだけれど、私が着ると変だった。着る人とデザイナーが一緒にやっていると変じゃないですか。そこが一番のエッセンス。指導案を書いている時ってというのは、ああか



な、こうかなって書く頭の働きがありながら、三つのデザイン画を描く時は十個くらいのイメージの中できちんとあえず三つ描いているとか、そういうような働きだと思っすよ。

浜口 外れている七個もきつと大事ですよ。

戸田 そうですね。多分そこに共通するものがあるんだと思っすよ。ばらばらに見えるけれど、デザインしている人も気付いていないかもしれないけれど、何枚も書いているうちに私はこころ辺が気になっっている、あの子とあの子のデザインとしては、っというの、そうやっっていると見えてくる。その働きが多分、指導案を書く作業なんだと思っすよ。

浜口 同じ人でも書き方をその時いろいろと変えてみるの、っすよ。

戸田 変えるのが普通でっすよ。気になっっているグループとか子どもについていっばい書いて、ほかの子はちよつと薄くなるということもあつていいと思っすよ。それは何を表しているのかとっすよ、薄い子たちがどうでもいいのではなくて、今ちよつ

ど子どもだけで何とかやれる時期に入っていると私が理解して、だからそんなに私が何かあれこれ考える必要ないということ指導案が示しちゃう。

浜口 振り返つてみればそういうことだつていうこと、っすよ。

戸田 そうですね。すぐしつこく書いてるなつていうところは、今どうにかしたいと私が思つている。だから半ば記録でもあり、半ば次の保育につないでいるみたいな、そういう今日から明日へとか、先週から今週へとか、先月から今月へつなぐ際に、振り返りつなぐを見る、大事な場になつている。

### つなぐことと個を大切にすること

浜口 戸田先生が大事にしているのは、それぞれの個がその個で固まらないでお互いにつなぐとっすよと面白いうことに気付くということ、っすよ。

戸田 私はいつもつながらなくていいと思つてます。四歳の後半になつてくると、友達と共に遊ぶ楽しさを味わうとか、その中で思いを伝え合うとか、

園の長期のねらいの中に入ることがある。そのような場合は、特に保育者は子ども同士をつなげたくなくっちゃうんですよ。だけど、人と人とのつながりつととても難しく、一人ひとりがきちつと自己を育てていけないと、馴れ合う形も生まれるんです。

これは、保育者が計画よりも、デザインをしたと思う例です。ある園に、リーダーの子Aと、その子にいつも付き従って遊んで楽しんでる子Bがいたんです。仲間として遊んでいたけれども、Bがある時、すごく面白いアイデアを思いついて一人でやろうとした。すると、今まで一緒に遊んでいた子どもたちは、楽しそうなBのアイデアにちよつと乗りながら、いつの間にか乗つ取つて自分たちの思いで遊びを動かしていくんですね。そうするとBのもともと持っていたアイデアは実現しない。でも仲間関係がもともとあるので、一見楽しそうには遊ぶんです。でもこの保育者は、Bの思いが中途半端に壊されてしまっていることに気付きました。Bのアイデアが面白くても、Aはリーダーでいただけであるため、

遊びが続かないと見極めるのです。そのような時に、あえて、「B君は一人で何か面白いことやりたいみたいだよ」と伝えたり、「二人でもやつてみたら……」

つてBを励ましたりするようなことがある。

**浜口** あえてつながりを切ることもある。

**戸田** そういう入り方が、期のねらいを無視してでも必要だなつて思う時があります。私は別にいつもつながりとか絆とかにあまり強くこだわらなくてもいいと思つていて、むしろどこかでダウトをかけながら、個というものが確立する方向と絆を結ぶ方向とこの二つはいつも見極めながらいかないといいけません。保育の場ではよく「仲良く」つていいですよ。子どもも一緒にいるとにぎわうので、楽しくなることが多いですね。でも自分自身が思いついたことに、個として向き合う勇気みたいなものを経験させてあげたい。そのことが、結果的に、絆に生きてくる。個々が力を持つて絆を結ぶと、集団が



▲戸田雅美氏



また大きく変わっていくので。その辺の見取りがすごく大事だし、難しいなと思って思うんですよ。

## 個の力はステップで伸びるわけではない

戸田 個の力に目を向けると、すごくシンプルに育ちがわかりやすいので、そういうことを求め過ぎる園もあるのはどうでしょう。集団というのは、化学反応のように見えることがあります。ある子の始めたことを面白いと思つて刺激を受けた子どもが、同じにやってみようと思つて思う。すると、同じことをやってくれたことに気付いた子どもがうれしくなつて変わってくる……みたいな。予想外の変化つていうのがある。それを考えると、計画を細かなステップで考えることはどうかと思います。

浜口 段階を踏んで育つという考え方ですね。

戸田 そうです。計画というものは、一段一段進めるのがあたりまえ、この子はこれができないから次はこれができるように、という強固な考え方です。このようにステップで計画を立てると、すごくシン

プルになります。例えば、友達にかかわろうとする時は、まず基本的な「ありがとう」「ごめんさい」とか、「入れて、いいよ」を言えるようにするとか。「それができないと次へはいけませんよね」と個々に応じて指導する。この子は言える。この子はまだ言えてない。この子はまだ途中、というように。

例えば先生が「表現ができないとだめだよ」つて言うのと、できるできないを中心として集団が構成されるようになる。これは、集団としてはとてもきつい状況になる。多分、震災などという状況下でそれをやったら皆生きていけないかもしれません。体育館に避難している時、平等に場所を分けたとしても、やっぱりこの人は歩くのが苦手だなんて、本人はそう言わないかもしれないけど、じゃあトイレに近い所にしてあげようとか、それからこの家族は赤ちゃんといるからおっぱいをやる時に陰ができる所を用意してあげようとかかしますね。それは多分表現して「私はこうです」つて言うてできたわけじゃないと思つんですよ。

浜口　そうですよね。察してね。

戸田　実は察してあげられる人だけが損しているわけではなくて、そういう集団ができると、その人もそれが何かの形で向けられて、「あなた、そんな人のことばかり気にしていて、自分が休んでないじゃないですか」みたいな。「ご家族の方は案外寂しい思いしているみたいだから、今日は皆のこといいから家族のところに戻ってあげなさい」とか。やっぱりそういう関係ができて、それによって支えられて、何とか一緒に生き延びることができると。それが絆っていうものなのかなと思うんですけど。

### 特別な配慮が必要な子どもと共に

戸田　ある幼稚園で、障害のある子がいる四歳児のクラスにいました。三月でしたが、お部屋にも入れず、ご飯も一緒に食べられず職員室で食べる。皆が集まっている時は、誰もいなくなった園庭を駆け回る。この子は園庭が好きという見方もできるんです。

けれども、同じ集団が五歳になった時、担任が替

わったんです。そして五月に見に行ったら、その子は部屋の中に居てご飯も一緒に食べているんですよ。しかも、声らしきものを発している。それを、周りの子がうれしそうに、「今さあ〇〇ちゃんさあ、▲▲とかって言ったんじゃない」って言うとき、ほかの子が「違ふよきつと」って勝手に話しているんですよ。

浜口　本人を前に。

戸田　皆で本人の言いたいであろうことをあれこれ推測して言い合っているんです。それがその子にとってもまんざらでもないんですよ、特に関心を示しているふうでもないけれど、でもそこに居るんです。すぐく心地よさそうに。これは何なんだろうって考えさせられました。その子の能力が一月にアップしたとか、周囲が一月にして、つまり年中クラスだった時の三月から年長クラスの五月の間に変わったとはとても思えないんですよ。そこが集団というものの面白いところですね。

浜口　それぞれの担任の先生のデザインの仕方が違うっていうことですかね。



**戸田** 全然違いますね。四歳の時の担任はベテランの先生だった。五歳で新たに担任を持った先生は、障害を持った子どもたちと個別にかかわった経験がちょっとあったんですが、担任を持つのは初めての先生でした。四歳児の時の先生は、一人ひとりをきちんと育てなければという気持ちが強くて、あの子は園庭が好きだからと、その時点ではその子のやりたなことを認めている。しかし、いざ入れられるようになってほしいと強く思っているから、認めつつもス Tepp アップできないことが嫌なわけです。入ってこないあの子のことが……多分気になってしまふ。でも五歳児の先生は、担任を持たれた時に、子どもたちとその子の問題を上手に共有していったのだと思います。というのは、そのクラスでは、お片付けも、経験も浅い初めての担任なんで、とても時間がかかるといいます。わやわやするだけでなかなか片付けが片付かないです。でも、感心したのは、ほぼ片付け終わりが終わったところのことです。その子はまだ相変わらず園庭を走り回っていました。すると先生が子ども

もたちに、もうそろそろお部屋は片付け終わりそうだから、片付けはみんなに任せて、先生はその子をお迎えに行ってもいいかと聞くんですよ、皆に。そうすると不思議なことに、急に、片付けが盛り上がるんです。「僕たち片付けとくから、先生は行って大丈夫」って。その会話を聞いただけで、その前のごたごたとか未熟さみたいなのが全部吹っ飛んだような感じがありました。つまりその子の問題は先生だけの問題ではなくなっていたことに気付かされました。よくその関係をつくったなことに関心しました。

**浜口** それって、子どもから見ると先生を頼りなく思うのとは全然違うんでしょうね。

**戸田** 多分。先生が何を思っただけで今ここで大変そうかかってことに気付いた途端に、自分たちはここは頑張らねばって言う、まあ五歳になってたつていうのもあると思うんですけど、思いが生まれたのでしょう。

## 保育者の表現としての計画

**浜口** 戸田先生は、デザインをするとか、計画を立て



てるっていうのは保育者の表現なんだとも言われています。保育者の主体性というか、結局それが計画とかデザインに表れてくるっていうことですか。

**戸田** 気持ちの中にあるから何も出さないでいいという考えもあると思うんです。けれども、何かの形で、たいていは書くという方法ですが、表現することとは、自分自身に返ることでもあると思うのです。そうすると自分が実はどういうことを大事に思っているんだらうということがわかる。例えば園長先生と小さいことでぶつかるけど、言われていることも、よく考えてみると、自分でも、今ではないけれども、もう少し先であればできたらいいなと思っていることに気付くとか。そうなると、どうして、今ではだめだと思ふのだからと考え始める。

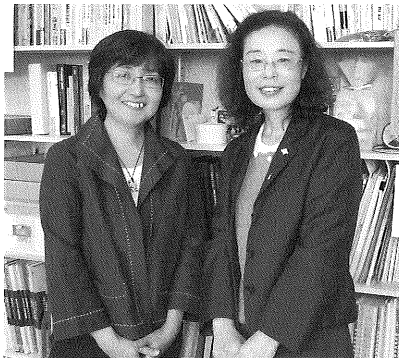
**浜口** 客観的に自分が見えてくる。

**戸田** 今自分が子どもをどうとらえているのかということが見えてくる。それは、記録であって、同時に計画でもある。おそらく、その両方をつなぐ中間的な存在が指導計画なのでしょう。だから、一般的

な「計画」という言葉では誤解を生みやすい。

それを表現として残して積み上げること、子どもの育ちだけではなく、保育者としての自分の育ちも表現されて見えてくる。この意味では表現することとはすごく大事なことだろうなって。表現しないしていると、日常に追われているうちに飛んでいつちゃうっていうか。それは自分が見えない状態。自分が見えないと思わないままどんどん過ぎていくことだし、子どもが見えないのに、子どもが見えないことに気付かないまま過ぎていくことになるのなかって思う。だから面倒くさいけど、デザインをし、それを表現する。それが「指導計画」を書くっていうことだと思っんです。

**浜口** 今日はありがとうございます。



(二〇二二年十月十二日)